
ルーテシアの第三王子

motomi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーテシアの第三王子

【コード】

N03070

【作者名】

m o t o m i

【あらすじ】

稀代の女たらしと評される放蕩王子エーリクは、ある時、堅物と名高い伯爵の末娘に興味を抱く。父の気質をそっくりそのまま譲り受け、面白みのない性格をしているらしいその令嬢だが、実際は？ 恋に慣れた王子様と深窓の伯爵令嬢の恋の話。の、つまり。

01：流れ星と夜の闇（前書き）

初めて投稿します。慣れていない上勢いで書いた為、おかしな点が多々あるかと思いますが、誤字脱字等ありましたらご一報下さるとうれしいです。

01：流れ星と夜の闇

西方領主のクラレンス伯爵は政治手腕には長けているが、生真面目で人間としての面白みは皆無である。

家族は妻が一人に、息子二人と娘が一人いる。次男は奥方に似て人懐っこい性格をしているが、後継ぎの長男と末娘のイレーナは父の気質をそっくりそのまま譲り受け、これまた面白みのない性格をしているらしい。

らしい、というのは、私がまだ彼女に会ったことがないからで、そして今日私は初めて彼女に会いに行く。

エーリク・ロウ・レオナード・ルーテシア。

この名前を聞けば大抵の女性はポツと頬を赤く染め、男性はぎゅっと眉を寄せてしかめ面を作る。大国ルーテシアの第三王子、放蕩息子のエーリク王子とは私のことである。世間では稀代の女たらしなどと言われているようだが、否定はしない。私は美しい女性が好きなのだ！ 美しいものを愛でてなにが悪い。男が女を愛でることは本能であり、子孫繁栄のためにはならないことなのだ！

……と、以前力説したら父上、兄上、母上に「お前は馬鹿か」と罵声を賜った。

訂正して「そうですよね、私が馬鹿でした。女性が男性を愛でることだつてありますよね！ 私はどちらかといえば女性を気持ちよくして差し上げる方が好きなのですが、してもらう方もいいかもしれません！ いや、大いに歓迎いたします」と申し上げたら、今度はそれぞれが座っていた椅子を投げつけられ、私は早々にその場を立ち去った。

普段はか弱くていらつしやる母上まであのよう椅子を投げ飛ばすとは、いやはや女性というものはわからないものである。父上が母上に今ひとつ強気に出られないのはそういう理由があるのかも知れない。

と、そんなことを考えている内に馬車はクラレンス伯爵の屋敷に着いた。領主たちは皆、領地の本宅とは別に王都に別宅を持っている。王都の屋敷に妻と子を住まわせ、年に数回、領主は領地と王都を行き来する。

忠誠心を示すため、といえば聞こえはいいが、つまるところは謀反を起こさせぬための人質で、私はこの制度あまり好きになれない。家族の情愛につけ込むなど実にナンセンスじゃあないか。カリスマ性でもって諸侯達を従えてこそ王としてふさわしいと私は思うのだが、現実的に考えてそれは不可能だと言うことも知っている。

数多の内乱を収め、この国を統一した賢帝、初代陛下のような方はもういないのだ。いるのは己の妻さえ御することのできない気弱で臆病な我が父、現国王陛下だけ。兄上たちも優秀だが、カリスマとは程遠く、第三王子である私自身も、女性を落とすことにかけては一流なのだが、如何せん政治手腕には恵まれなかった。

……と、またしても話題がそれている間に、馬車を降りた私はスウィットと屋敷内に侵入した。

不法侵入？ 王族の私に国内で入り込めぬ場所などないのだよ。

と、言いたいところだが、実は前もって協力者を作っておいたのだ。「殿下、私は何度もお止めしましたからね」

ご紹介しよう、本日の協力者、フェルナンド・リシエル・クラレンスくんだ。

「上司命令とは言え妹を売るなんて感心しないな、フェルナンドくん」

唆した私が言うことではないが、イレーナの實の兄でありながら、男との密会を取り持つなど、言語道断。全く許し難い所業だ。

「だから、私は嫌だって何度も申し上げたではないですか」

「私はいいのだ、王子だから。だが、しかし。」

「今後は、誰が来てもイレーナとの仲を取り持つんじゃないぞ」

「……」

「返事はどうした？ フェルナンド」

顔をのぞき込んでやるとフェルナンドは以前見かけた舶来のミイラのごとく顔をしわくちやにして低く「はい」と呟いた。

全く、そのように何でも顔に出しては上手く世を渡っていないぞ

不出来な部下に上司心から親切に苦言を呈そうとしたが、口を開いた瞬間、親の敵とばかりに睨まれたので止めておいた。イレーナ嬢も待っていることだしな、うん。

「彼女の部屋はこの上か？」

シンプルだがよく手入れされた庭に立ち、私はすぐそばにあるバルコニーを見上げた。

「……そうですが、一体どこから入り込むつもりですか、殿下」

「ああ、フェルナンド！ 君は一体なんて愚かな質問をするのか」
妹を上司に売るだけでなく、ロマンも解せないなんて本当に男としてダメダメだな！

私は顔に手をあて、天を仰いだ。あまりにも不出来すぎて彼が可哀想になってくる。

「いいかい、フェルナンド。ロマンスといえばバルコニー。密会といえは夜の闇に紛れ流れ星のごとく愛しい人の元へ忍んでいくことが定番ではないか！」

「光り輝く流れ星のごとく闇に紛れるというのは少々矛盾している気がするのですが」

と無粋な発言をする部下は無視して、私は早速バルコニーへと手をかけた。わざわざ困難な塀を乗り越えて、恋しい人に会いに行くというのが乙なのだ。

そここのところ、まだ若い彼には理解できぬらしい。まあ、年齢で言えば数ヶ月ほどしか変わらないのだが。

「イレーナ、愛しい私のイレーナ嬢。いらっしやいますか」

慣れた手つきでバルコニーに上った私は、自慢の美声で姫君に語りかけた。

薄いレースのカーテンに覆われ、室内はうっすらとぼやけ様子を

窺うことができない。私はじつとその場に佇んで、その白いカーテンが開かれるのを待った。

「どなた……？」

突然の来訪者（私のことだが）に、イレーナの美しい声は不安を含み揺れていた。

可愛らしいことだ。

彼女は今年で十六歳。そろそろ社交界デビューをしても良い年頃だというのに、父母に大切にされるあまり未だその姿は深窓に隠されたままとなっている。

五つ上のフェルナンドや七つ上のアルバートを見る限り、容姿はそう悪くないだろうと推測する。

母君の容姿を受け継いだアルバートは柔らかな茶髪に優しげな緑の瞳をもつ美男子で、一笑みすれば女の一人や二人、いや十人や二十人はコロツと落ちそうな容姿の持ち主だ（性格さえああでなければ完璧なのに、とよく言われている）。次男のフェルナンドは父君と母君両方に似て、柔らかな茶色い髪は兄と同じ母譲り、濃紺のつり目は父譲りで少々冷たい印象を見る者に与える。これで父や兄似の性格であったなら近寄りがたいこと間違いなしなのだが、しかし中身は母似で穏やかで、いつも人好きのする笑みを浮かべては他者の警戒心を拭い去る。それゆえ兄や父に比べ断然女性に人気があり、恋に頑ななクラレンス家には珍しいとよく噂されている。

さて、クラレンス家の男性陣のことはここまでにして、目下注目すべきは深窓の姫君イレーナ嬢である。

「イレーナ嬢、私は貴女の恋の奴隷。貴女に恋し、愛しさが募ってここまでやってきてしまいました」

口説き文句は少しクサすぎる方が丁度いいのだ。

ゆつくりと窓際に近づくと、はっと息を呑む音が聞こえた。

「怖がらないで、貴女の嫌がることはしないから」

「……どなたなんですか、貴方は」

もう一度同じ問いが繰り返される。

「今申し上げたでしょう。私は恋の奴隷、恋の病にうなされて、気づけば愛しい貴女に会いに」

「夜遅くに他人の家に忍び込んだ拳句、私の部屋にまで入り込もうとしている貴方は一体何者かと聞いているのです」

強くなる語調に折角の愛の囁きを遮られ、私は軽く眉を寄せた。

「どうやら父君、兄君と同様、イレーナ嬢も恋に頑なでいらっしやるようだ。」

「そんなに私の名前が気になりますか？ 愛しい人」

「ええ、不法侵入者として通報して差し上げますわ」

「これは手厳しい。だが、私を通報することなど誰にも出来ないのだよ」

つい、とレースに手を掛ける。いつまでも開かれる気配のないそれに、私は自ら手を伸ばし二人を遮る邪魔者を取り払った。

「エーリク＝ロウ＝レオナード＝ルーテシア、それが私の名前です、イレーナ嬢……？」

「おや？」

私の台本では、ここで目を見開くのは彼女のはずなのだが、実際にカーテンを開き目に入ってきた光景を見、目を見開き固まったのは私のほうだった。

室内には見たことのある顔が一つと、帳をはさみ向こう側に身を隠して立つ人影が一つ見えた。後者はおそらく今宵のお目当て、イレーナ嬢だろう。前者は

「アルバート！」

どうして君がここに、と声をあげれば、アルバートは「それはこちの台詞だ」とでも言いたげに眉間に皺を寄せた。

「殿下、こんな時間に一体妹に何の御用です」

「無粋なことを聞くのだな、君は」

夜に男が女のもとへ忍び込みすることなど一つしかないではないか。暗にそういうと、生真面目男はぎゅっと恐い顔をしてこちらを睨む。くっ……優しい容姿のくせしてどうしてそう迫力があるの

だ。フェルナンドと中身を入れ換えてもらったかどうかと一瞬思うが、しかしフェルナンドのあの切れ長の瞳で今ののようにギロリと睨まれては迫力が倍増しになるだけなので却下する。

「殿下が色々な女性のもとへ通っていることは存じておりましたが、まさか妹にまで手を出そうとなさるとは」

「別に手を出そうとまでは考えていない。ただ噂に聞く深窓の姫君がどのようなものかと興味をもっただけではないか」

まあ、あわよくばと思っていたことは否定しないが。

「というか、どうして私が来ると分かったんだい？　もしかやフェルナンドのやつ裏切って……」

「いえ、分かっていたわけではなく。たまたま部屋の前を通りかかったら声がしたものですから、気になりました……今、フェルナンドが何とおっしゃいましたか？」

「ん？　いや、なんでもない」

フェルナンドが裏切っていないのなら別にいいのだ。では、密会の邪魔も入ったことだしこの辺で。と方向転換しその場を立ち去ろうとするがそうは問屋が卸さない。

「殿下？」

またもあの恐い目で見下ろされ（むかつくことにアルバートの方が私より背が高い）、蛇に睨まれた蛙のごとく私は身を縮こまらせた。

すまん、フェルナンド。

輝く流れ星はやはり闇に紛れることは出来なかったようで、紛れるどころか辺りを照らし、約一名の犠牲を出してその夜のロマンスは失敗に終わった。

後日、私は自分で言うのも珍しく執務室の机に向かいある書き物をしたためていた。傍らには仏頂面をしたフェルナンドが立っ

る。あの日、私を手引きしたことが原因で（しかもその一部始終を私に暴露され）アルバートとクラレンス伯爵にこつてりと絞られたフェルナンドは、あれ以来上司である私の顔を見る度に眉を寄せるようになった。例え嫌な者でも上司は上司、心情を大っぴらにして顔を顰めてばかりいては出世に響くぞと注意してやるのだが、その都度あの日のことを持ち出して逆に説教されてしまうので口を閉じるしかない。

「よし、書けたぞ」

文末に流麗にサインを記し、私はたつた今書き上げた便箋を丁寧に折り封筒へ入れた。仕上げに専用の封蠟で封を閉じれば完成だ。うむ、我ながら良い手紙が書けた。ほれほれと封筒を見つめた後、立ち上がり傍にいた侍従に渡す。これで数日後には目的の人物から返事があることだろう。

「どなたへの手紙ですか？」

一連の動作を見守っていたフェルナンドが、ついに耐えられなくなったのか口を開いた。にやりと笑って振り向けば、冷たい顔の青年は、いつのまにかムツツリをやめて、ただ首をかしげている。

「アルバート宛だ」

「兄上に？」

問いに答えればまたも首をかしげる。

この仕草も母親似か、先ほどまで凍える印象だった切れ長の瞳は丸く和らぎ、きよとんとした純粹な興味の色だけが映し出されている。

「殿下が兄上に御用事があるなど、珍しいですね」

「おっと、フェルナンド君。私は何もアルバートに用があるから手紙を書いたわけではないよ」

「は？ でも、行き先は兄上宛なのですよね」

「そうだが、しかし違う」

普段は領地に籠もり父親の手伝いをしているアルバート、先日はたまたま王都の屋敷にやってきていたが、しかしほとんど顔も合わ

せぬ相手に然したる用事があるはずもない。

「私が、用があるのは、イレーナ嬢の方だよ」

次男が駄目なら長男につてね。

「今度は兄上に取次ぎを頼むおつもりですか……」

「そういうこと」

ふふん、と決めポーズ付きで言つてやると、フェルナンドは一瞬のうちに先ほどの仏頂面に戻つた。ふむ、百面相かい？

「殿下……貴方という人は、本当に懲りないお方ですね」

呆れ顔で呟くフェルナンドを無視し、私は一人先夜のリベンジを誓つたのであつた。

02：届かぬ祈りは天に消える

届いたばかりの手紙に目を通しながら時折ふつと笑みをこぼす妹の姿に、私は一人顔を顰めた。

例えば道を歩いている者に声をかけ、この国で有名なものは何かと順に挙げさせる。すると、十もいかないうちにある方の名前が挙がることだろう。

エーリク＝ロウ＝レオナード＝ルーテシア。

稀代の女たらしと名高い我らがルーテシアの第三王子である。

始まりはまだ殿下が十代半ばのお年頃であった時、確か十四かそのくらいの年齢でいらっしやったと記憶している。

上に二人の兄君はあれど、由緒正しき王家の血を引き、将来は国を動かす立場に立たれるだろうと期待されていた殿下は、幼き頃より幅広い分野の教育を受け育てられた。当時の教育係りに話を聞けば、皆涙ながらに「それはもう勤勉で、二人の兄君たちに負けず劣らず優秀であったのですよ！」と、情感たつぷりに語ってくれる。そして最後には決まって呟くのだ。

「それなのに、どうしてあんなことに」

今から七年前、十四歳の誕生日を迎えた殿下はある時突然王宮から姿を消した。

失踪の期間はほんの一週間ほどであったが、けれど王子殿下が行方不明になったとあれば、国中は大騒ぎ。王族を警護する近衛兵に騎士団も三分の一を加え王子の搜索を行った。一日経っても見つからず、二日、三日と時が過ぎ、一週間経ったある日、ようやく王子は城へ戻ってきた。そして言うことには。

「いやはや、どうにも素敵な女性がいたので、つい追いかけて隣国まで行ってきてしまった」

ヘラリと笑う姿に一週間前の面影はなく。勤勉で真面目な王子は

どこへやら、以来別人のように軽薄に変わってしまった王子に、人々は「どこかで中身を入れ替えられたのでは？」「誰ぞに呪いを受けたのだ」「本物の王子は既に亡くなり、偽物がなりすましているのでは……」などと冗談半分、本気半分で噂したのであった。

その後、王子は皆の期待を裏切り、元の性格に戻る兆しは一向に見えず、反対に貴族の夜会に出向いては着々と“女たらし”の名を世に広めていった。

今では王子が口説いていないのは乳飲み子かお迎え目前の老婆だけ、とまで言われるようになり、ついに先日、我が家にもその毒牙が及ぼされた。

「この愚か者！」

張り上げた声に、やつはびくりと肩を揺らした。

フェルナンド「リシエル」クラレンス、我が愚弟である。二つ下の、今年で二十一になる弟は、父譲りなのはその切れ長の瞳くらいで、後はまるで母上に似て軟弱であった。いつも無意味に笑みを撒き散らし、周りの者は、人当たりの良い青年だとかやつを評価するけれど、私はそうは思わない。角が立つのを恐れ、何でも相手の要求を飲み頷く弟は、ただの臆病者である。後々の結果を考えず、殿下の考えに楽に流された結果がこれだ。

「上司に頼まれたからといえど、実の妹へ夜這いの手引きをすることは何事だ。殿下がイレーナの部屋に現れた時、心底驚いたが、それを招き入れたのがお前だと知って、私がどんなに恥ずかしかったとか」

先夜のことを思い出し、痛むこめかみを抑える。そのうち胃痛までしてきそうだ。

「父上、母上がどれだけイレーナを大事にしてきたか知らぬ訳ではあるまい」

低く言ってギロリ見下ろせば、弟は慌てた風に首を縦に振った。

ここで首を横に振ったら問答無用で斬り捨ててやるつもりだった

が、しかし裏を返せば大切にしていると知った上で殿下に妹を差し出したことになる。確信犯か。それとも実行時都合よく頭から消えていたとも言うのか。どちらにせよ大罪であることは変わりない。「フェルナンド、身内の情けとして方法を選ばせてやるっ」

「……は？」

「火責め、水責め、市中引き回し、はたまた生き埋めという手もあるが、好きな処罰の方法を選ばせてやる」

お勧めはこの場で刀を使い真っ二つ、だ。

「っ！」

声を失い後退りするフェルナンドを、逃がさぬと部屋の端に追い詰めた時、それまで黙っていらした父上が口を開いた。

「その辺にしておけ、アルバート」

「ですが、父上！」

反論は静かな眼差しに制されて、私は口を噤んだ。父は普段から無表情なせいも、妙に迫力のあるお方なのだ。冷やかな濃紺の瞳に見つめられれば、弟ではないが声を失う。

「フェルナンド」

その場を震わせるような低い声で、父は弟の名を呼んだ。部屋に響いたその声に、弟は数瞬視線を泳がせた後、「……はい」と言って父に視線を合わせた。

「改めて問うが、アルバートが言ったことはすべて本当か」

「は、……」

父の問いに、フェルナンドはまた躊躇うように視線を泳がせた。まるで幼子が悪戯をして親にしかられているようである（まさしくその通りだが）。

「殿下を招き入れ、イレエナの部屋まで手引きしたことに異論ないか、フェルナンド」

「……はい」

「殿下の下で働いてどのくらいになる」

「四年ほどになります」

少し考えた後、弟は答えた。

十四の年に忽然と行方をくらまし、以来“稀代の女たらし”としての才能を開花 失礼ながら、これは嫌味だ させた殿下を、それでも三年ほどは王宮の者たちはある種祈りのような気持ちで見守っていた。いつか元の勤勉な殿下に戻ってくれるのではないか。いつか呪いが解けるのではないか。偽者を倒しに本物がやってくるのではないか。

しかし、その祈りも空しく、殿下はいつまでたっても色狂いで女たらしのNewエーリク王子殿下のままであった。もう旧型のエーリク殿下に戻ることはないのだ。三年間待ち続け、ようやく旧型の帰還を諦めた陛下と王妃様は、New殿下に補佐兼お目付け役をつけることにした。新型の殿下がこれ以上道を踏み外さぬように、傍で監視しそれを制止してくれる者が必要だと考えたのだ。

そして、白羽の矢が立ったのが我がクラレンス家の次男、フェルナンドであった。

領主としての政治手腕に優れ、また王子殿下の気性とは正反対の生真面目な性格を持つ父アルフリード「エレン」ヨナ「クラレンス」“堅物”と名高い父の息子であるフェルナンドならば、殿下の手綱をしかと握り、また政務の面でも支えていけるのではないか。そう思った陛下達の期待の元、弟は殿下の補佐役となったわけなのだ。

だというのに、殿下を制するどころかあまつさえ女性 しかも自らの妹との仲を取り持とうとするとは、本末転倒。折角目を掛けて下さった陛下たちにどう申し開きをすればよいか、全く、頭の痛くなる愚か者だ。

「四年間殿下の下で働き、傍に侍り、お前は殿下のご気性をよく存じていたのではないのか」

問うような口調であるが、肯定のみしか認めぬといった言い方で父は言葉を紡いだ。

「それは……」

「殿下がイレーナの元へ通い、そのことで妹がどうなるか考えはしなかったのか」

「そうだ！ もし私が屋敷にいなければ、今頃イレーナは殿下に汚されていたのだぞ」

「アルバート」

思わず話に割り込んだ私に、父が厳しい声で咎める。

「言葉が過ぎるぞ。それに、今私が話をしているのはお前ではない」
「……申し訳ありません」

失言に気づき、唇を噛み締めて一步下がる。

弟の愚行を思うと、つかつかとなり我を忘れそうになる。嫁入りどころか社交界デビューもしていない妹に危うく傷がつくところであつたのだ。父上もさぞお怒りのことだろう。

男、男と二人続けて男が生まれ、三人目にしてようやく生まれた娘がイレーナだった。母上に似た女の子を欲しがっていた父は、それはもう妹の誕生を喜び、母と共に大切に、大切に屋敷の奥にしまいいこんで育てた。家族や使用人以外の異性には極力姿を見せぬようにし、十六になるまで一切傷がつかないように細心の注意を払って守ってこられたのだ。礼儀作法や領主の娘として様々な知識も身につけさせ、ようやく花開いたかと思われた矢先、とんでもなく悪い虫につかれた。

その怒りたるや、イレーナの兄である私にも到底思い及ばぬものだろうと推察する。本当ならばその悪い虫もろとも弟を切り刻み、魚の餌にでもしたいお心でいらっしやるだろうに、父は怒りを堪え、冷静に弟と対峙している。ここで私がかつとなり怒りに任せ弟に斬りかかるなど許されないのだ。

「さて、フェルナンド、お前の考えを聞こうか」

弟に向き直り父は言った。

「殿下の気性をよく知り、また私がイレーナをどれだけ大切にしているかよく理解しているはずのお前が、どうして今回殿下の企みに手を貸そうなどと思ったのだ」

「それは……」

蛇に睨まれた蛙。

弟はぎこちない様子で口を開く。

「私は、この四年エーリク殿下の下で働き、殿下のお振る舞いを目の当たりにし、よく理解してきたつもりです。殿下は、確かに世間では“女たらし”などと言われていますが……いえ、全くもってその通りなのですが、けれど女性が嫌がることを無理矢理なさる方ではありません。あの方は、ご自身でも“恋の奴隷”“女性の奴隷”だとよくおっしゃるように、見境なしに女性を口説きはすれ、引き際を心得ていらっしゃる」

「では、殿下がイレーナのもとへ忍んで行ったとしても、イレーナが嫌がれば何もせずに帰ったというのか」

「おそらく、そうだったと思います。それに」

「屋敷にはアルバートがいて、そして私も翌日には屋敷に着く予定となっていた」

「はい」

被せられた言葉に、頷く。

「私が屋敷にいることを見越して殿下を招きいれたというのか！」

「アルバート」

「……申し訳ありません」

「それで、お前は殿下の手引きをすることに承諾したと」

「はい。それと」

「なんだ？」

「妹にそろそろ異性との接し方を覚えさせた方がいいと思ったのもあります……」

「なるほどな。それでお前は殿下に利用されながらも、己も殿下を利用したというわけか」

身の程知らずの発言に、父はふっと口の端を緩めた。

「確かに、私はイレーナを思うあまり過保護にしすぎた。おかげであの年になっても未だ世間知らずで、人見知りも激しい。社交界デ

ビューをし、夜会に出るようになれば自然直るかとも思っていたが、お前はそれよりも前に男に慣れておくべきだと考えるのか」

「はい。夜会に出れば自然に、という父上のお考えですが、私はそうは思いません」

「ほう？」

「むしろ、いきなり社交の場に放り込まれては、失敗するばかりで一層人見知りが増しくなるのではないでしょうか。母上にも話をお聞きしましたが、やはり人付き合いに苦労されたようです。あの母上でさえそうだったのですから、ほとんど屋敷に閉じこもって過ごしたイレーナでは尚のこと苦しむのでは」

くっ、ここで母上の名を出すのは卑怯ではないだろうか。あまり表に出しはしないが、母のことを心底愛していらっしゃる父上は、
「それもそう、か」とフェルナンドの言に丸め込まれかけた。

父の様子に、一人歯噛みして口を出すべきか否か迷っていたとき、
「だが」と低い声が続いた。

「それはお前が決めることではない」

きっぱりと言い切る父上。私はひそかに「流石父上！」と心の中で称賛を送った。

「まして父や兄に内緒で殿下を引き合わせるなどもってのほかだ。

イレーナだけでなく、殿下にも失礼である」

「申し訳、ありません」

「それに、例え殿下がイレーナに手を出さなかったとしても、年頃の男女が一晩同じ部屋で過ごしたという噂が立ったとしたら、どれだけ妹が害されるか、そこまで考えはしなかったのか」

「……」

「それなりに頭が回るくせして、最後まで展開を予想せず上面だけを撫で思考を停止させるのは、お前の悪いところだ。もう少し賢くなりなさい。物事を一方面だけ見て満足するのは子供がすることだ」

「はい」

「しばしの間謹慎を申しつける。仕事があるとき以外は屋敷に籠も

り、己の浅慮を反省するといひ」

罰の悪そうに表情をゆがめるフェルナンドに、父は見事な裁きでもって処罰を言い渡した。私としては些か甘すぎるように思えるのだが、しかし敬愛する父上が出した結論である。肅々とそれに従うことにした。

そうして、今回の事件は幕を閉じた、
かのように思われた。

「アルバート様、お手紙で御座います」
「うむ」

数日後、私は一通の手紙を受け取った。

手紙を持ってきた使用人に頷きを返し、私は送り主を確かめようと手紙を裏返す。封を閉じる蟬は王家の紋章、いや正しく言えばその紋章は

「エーリク殿下!？」

第三王子であるエーリク殿下だけが用いることの出来る紋章に、私は一体何事かと中身を確認した。手紙を拝見することしばし。

「……嘘だろう」

それは妹との仲を今度は私に取り持てという内容のものであった。そんなもの即座にお断りだ! と破り捨てたくなるが、しかし相手が相手なだけあってそれは出来ない。

手紙には、『フェルナンドに頼んだ密会は失敗してしまっただが、私は諦めない! ついてはもう少し身を慎み、初心に戻り文通からお付き合いを始めようかと思う。お前を通しイレーナに私と文通をしてくれるよう伝えてくれないか』と、まあ簡単に訳せばそのようなことが書いてある。殿下の諦めの悪さに頭痛だけでなくついに胃痛までし始めた。

数分悩んだ後、先日の弟のようになるわけにはいかないかと、父に指示を仰ぐことに決める。

父ならば上手く知恵をまわしてこの申し入れを断る術を考えてくれるのではないかと期待し、執務室を訪ねた私だったが、しかし返

つてきた答えは

「いいんじゃないか」

だった。

「先日フェルナンドに言われ考え直すことにしたのだ。さすがにまだ直接男と会わせるわけにはいかないが、手紙ならほどよく距離感も保て、間接的にはあるが接し方も学ぶことが出来るだろう。それくらいなら、わざわざ私の指示を仰がずとも承諾して構わん。…アルバート、お前の弟は変に知恵が回り小賢しいが、反対にお前は正しいことをしようとするあまり身動きが取れなくなる傾向がある。もう少し自分で考え動くことを学べ」

予想と異なる返答を頂いた上、小言まで賜った私は、眉間に皺を寄せて殿下へ承諾の手紙を返したのであった。

そうして、話は冒頭に戻る。

エーリク殿下との文通を始めたイレーナは、今まさに殿下からの手紙を読んでいた。

文通という清く正しい交際手段には文句はないが、しかしその相手が殿下であることがどうにも気に入らない。知らぬ間に、イレーナを見る顔も険しいものへと変わっていた。

「なあに？ アルバート兄様、さつきから怖い顔をして」

なにか御用？ と小首を傾げる妹に、どうしても堪えきれず溜息を漏らす。

これがNewエーリク殿下ではなく、旧型の殿下であったならば諸手を上げ交際を後押しするというのに。当時は他人事のように思っていた私だが、今更ながら殿下が生真面目な性格に戻ってくれないだろうか、天を仰ぎ、希うのであった。

03：漂う雲の掴み方

その日殿下は、執務室の机に向かい書き物をしていらっしやった。鼻歌を歌いながら上機嫌に書き綴られているのは、先頃始まった私の妹イレーナとの文通の手紙だ。山のように積み重ねられた御政務の書類を無視し、いかに女心を掴む文章をひねり出すかということに精を出される殿下に、私は複雑な気分で眉を寄せた。

数日前、殿下に頼まれ密会の手引きをした私は、その後あつけない父と兄にそのことがばれ（というかばらされ）、こつてりと説教を食らった挙句、謹慎を言いつけられた。兄には屋敷で顔を合わせるとに射殺さんばかりの視線で睨みつけられ、また謹慎のせいで仕事が終わった後ろくに出かけることも出来ず、自業自得とはいえず鬱憤の溜まる日々を過ごしている。殿下を見る視線も自然険しいものになり、八つ当たりだと分かっている。つい良くない態度をとってしまう。

そんな私の振る舞いを見るたび、「あまり表情を出しすぎると出世に響くぞ」などと冗談めかしておっしゃるので、余計、誰のせいでもこんなことに、と苛立ちが募るのである。

私が初めて殿下にお会いしたのは、十七歳の時だった。

十四の年に突然行方不明の身となり、無事に帰還されたかと思うと別人のように軽薄な行動をとって人々を悩ませていた殿下の噂は、当時まだ西方の領地で父の仕事を手伝っていた私の耳にも届いていた。

「また第三王子殿下が問題を起こしたそうだ」

父と仕事で出かけていた兄が、帰ってくるなりそう口にする。

「今度は子爵婦人と不倫なさっているとかで、王宮はその処理に追われているらしい」

「以前にもどこかの貴族の奥方と恋仲でいらっしやいましたよね」

「いや、その方ではない、別の方だ。……全く、エーリック殿下は次から次へ問題を起こされる。将来国を背負われる立場にあらせられる方が女に現を抜かすなど、我が国も墮ちたものだ」

国を憂え、大げさに溜息を吐く兄とは反対に、私はどこか他人事のようにその話を聞いていた。世間を騒がせる第三王子殿下は、偶然にも自分と同じ年でいらっしやったが、「お前は決して殿下のようになるのではないぞ」とつけ加えられる兄の小言に煩わしく顔を顰めるくらいで、殿下自身にこれといってなにか思うことはなかったのである。遠い王都のことよりも、目の前の、父の仕事の手伝いや勉強だけで精一杯で、近い将来その噂の主であるエーリック殿下と日々顔を合わせる関係になるなど、その頃は思ってもみなかった。

ある日、父と共に王宮に呼ばれた私は、突然エーリック殿下の補佐役を任じられる。父の優秀な政治手腕と、その生真面目さを高く評価した国王・王妃両陛下からの直々の御達しだった。

「話が違うではないですか母上！」

王妃陛下に連れられて部屋に参った私に、殿下が声を上げておっしゃられた第一声がそれである。

殿下は信じられないと言いたげに目を見開き、王妃陛下に詰め寄られた。その憤慨したご様子は甚だしく、一体事前にどういいう話になされていたのかと、私も殿下と同じように王妃陛下を見つめた。

「ええと、話が違っちゃってどういいうこと？」

視線を集めた陛下は、しかし何のことを言われているかわからないという風に首をかしげられた。

「エーリック、母はあらかじめ貴方に伝えておいたはずなのだけど」

「ええ！ 確かに、今日補佐役の方が参られるということは聞きませんでした」

では何が話し違いだと言うのか。今度は殿下の方へと視線が集中する中で、殿下はすっと片手を上げられた。そして

「彼は一体何なのですか！」

と人差し指でビシリと私を指差される。

わ、私!?

思いもよらぬ展開に動揺を隠せず固まる私に、王妃陛下が代わって口を開かれた。

「なにつて、フェルナンド」リシエル「クラレンス殿よ。西方領主、クラレンス伯爵の御次男の」

しかし殿下はそういうことを言っているのではないのだと、おっしやられる。

「あら、じゃあ一体どういうことなの？ エーリク」

「どういふこともなにもありません、母上」

やれやれと肩をすくめられた後。

「彼はどこからどうみても男にしか見えないではないですか!」

ずばり言つてのけた殿下に、一同は「は?」目を点にした。

「もう! 母上から補佐役の話を伺つて以来、私はずっと楽しみにしていたのですよ! 私に合う最適な人物が見つかったとお聞きして、どんなにか美しい女性だろうと、夢にまでみて待ちわびていたのに、まさか男だったなんて……」

恨めしげにみられるが、私に非があるうはずもない。

嘆かれる殿下に、ただただ呆れていたその時、「この大馬鹿者!」私の横を物凄いスピードでなにかが通り過ぎた。

ゴッソッ

「っ」

傍らを見やれば、王妃陛下が眉を寄せ、拳を握っていらっしやる。

「お、おおう……母上、殴るならせめて平手打ちにして下さい」

頬を押さえてうずくまる殿下を、王妃陛下は虫けらのごとく見下ろされた。

「お前は……。本当に、どうしてそんな風になつてしまったのです。以前は真面目で優しい良い子だったのに。それが今は女、女と、まるで色魔のように女性ばかり追いかけて。お前がそのようだから、今回お目付け役として補佐をつけるように決めたのではないの」

「いや、てつきり補佐というのは公私共に私を支えてくれる、いわば妻もしくは愛人のような」

ゴッソ！

第二発目が打ち込まれる。

「母は悲しい！ 今後はこれ以上お前が道を踏み外さぬよう、しっかりとフェルナンド殿に見張っていただくゆえ、慎んで行動するよ
うに」

ぴしゃり言い放ち、王妃陛下は部屋を出て行かれた。

頬の痛みに悶絶する殿下に、これからやっていけるだろうかと不安に思う私だったが、ふとあることに気づき眉を寄せた。薄灰色の瞳に映る複雑な感情。陛下を見送るその視線に乗せられた感情を確かめようと、不躰にも殿下の顔を覗きこんだとき、それは掴む間もなく消え去った。

「はあ、やれやれ。母上も手厳しいお方だ」

言いながら言葉とは裏腹に陽気な笑みを浮かべる殿下に、掴み損ねたものを追求する気持ちはあつという間に薄まり、“呆れ”の感情がそれを塗りつぶした。

「さて、フェルナンド君だったかな？」

「はい」

呼ばれて、しゃきりと姿勢を正す。

王妃陛下に二度も鉄拳を賜り、すっかり乱れた金色の髪を直しながら、殿下は私を見、そしてふつと笑みを零した。

「あの……？」

どこがおかしかっただろうか。きよとんと首を傾げる私に、殿下は一層笑みを深くなさる。

「いや、あまりにも分かりやすすぎるのでつい。君は感情が顔に出るタイプだね」

「……申し訳ありません」

謝ると、どこか投げやりな様子で殿下は言う。

「別に謝ることはないよ。私を見ると、皆同じような呆れ顔になる」

君ほどあからさまに顔を顰めた者は初めてだったけれど、と言葉は続き、私は恥ずかしくなって顔を伏せた。

感情を顔に出しすぎることは、よく兄にも注意されることだった。他者にも己にも厳格な父を心から敬愛する兄は、外見はまるで母譲りだというのに、中身は父にそっくりで、常に己を厳しく律し、弟の私にもそれを要求する。『男があまり感情を露にするものじゃない。父上のように何事にも動じず、冷静に対処することが、本来男のあるべき姿なのだ』繰り返し言い聞かせられた言葉はいつのまにか鎖のように身を縛り、知らぬうちに私を戒めていた。

またやってしまった、と心中で悔いていたとき、殿下は何気なく口を開かれた。

「素直なのは良いことだよ。分かりやすすぎるのは、短所と捉えられることも多いが、裏を返せば人間らしいということだ。能面のよくな無表情よりも、私は表情豊かな者の方が親しみやすいと思う」君が女性でないのが酷く残念だが、と前置きした後、殿下はにっこり笑って手を差し出された。

「これからよろしく頼むよ、フェルナンド」

微笑まれる殿下の手をとりながら、私は噂で散々聞かされていた“放蕩王子”に、ほんの少しの好感を抱いたのである。

そして、四年後。

「殿下、そろそろ溜まった仕事をなさって下さい。殿下がサボられるせいで他の者にも支障が出るのですよ」

相も変わらず手紙を書き続ける殿下に、私はついに注意し、申し上げた。

手紙を書き始めてから既に半時が過ぎている。このままでは一向に片付かない書類の山に、雪崩が起きる前にそれを減らして頂かなくてはと、もう一度「殿下、」声をかける。

しかし、薄灰色の瞳はちらりと私を見るだけで、すぐに机上の便箋へ戻っていった。

お側に仕えてきた四年間。殿下のすぐ隣に控え、殿下の振る舞いを見、諫めてきた私が出した結論は、殿下はやはり“女たらし”の“放蕩王子”であるというものだ。

じつと机に向かわれることを厭い、目を離せば、好機とばかりにどこかへ消えてしまわれる。空を流れる雲のように掴みどころないお方で、時に大雨や嵐を起こし人々を困らせる。非常に厄介で、しかしどことなく憎めない方でもある。

人の機微に聴くていらっしやり、相手の本当に嫌がるようなことはしない。普段はそれを、女性を口説くことにはかり使っていらっしやるが、時々わざと道化として振舞っているのではないかと思えることがある。四年間一緒にいたせいで情が湧きそう思うだけなのかもしれないが、けれど長いようで短い月日を経て、私の中の殿下への評価は確実にプラスのものに変わっていた。

「殿下」

再度呼べば、殿下はちょっと罰の悪そうな表情を浮かべ顔を上げた。

「仕方ないだろう、イレーナへの手紙の文章がなかなか思いつかないのだ」

なにが“仕方ない”のかさっぱりわからないが、殿下はこれっぽちも仕事をなさる気がないようだ。

「後でやるから、今は放って置いてくれ」

「殿下、そう言っただけもなさったためしがないじゃないですか。政務を疎かにし綴られた手紙を頂いても、妹は嬉しくないと思いませんよ」

せめて山積みになった書類の整理でもしていようと立ち上がると、やや驚いた表情の殿下と目が合った。

「なんですか？」

「……フェルナンド、君、私の手紙を読んだのか？」

「はい？」

あらぬ疑いをかけられ、目を見開く。

「そのような無作法、私がするわけないじゃないですか」

「だが、それならばどうして私がいつも手紙で彼女に怒られていることを知っているのだ！」

「は？」

首をかしげる私に、殿下は自ら妹から送られてくる手紙の内容をばらした。甘い言葉の並べられた殿下の手紙に、妹はそっけなくこう返事をするらしい。

『ご政務ははかどつていらっしやるのですか』

『あまり手紙ばかりお書きにならず、お仕事にもお励みください』

『公爵家の夜会に出席なさったようですが、きちんとお仕事を片付けてから行かれましたか？』

我が妹ながらこれっぽっちも可愛げのないやりとりを、思わず閉口する。

「殿下、よくこんな面白みのない文通続けていらっしやいますね」

言つと、殿下はそんなことはない！ と勢いよく立ち上がられたが、「そんなことはないぞ……」とすぐさま弱弱しく椅子に戻っていかれる。

「別につまらないわけではない。私自身、時々母上と文通をしているのではと少しばかり悩まないでもないが。しかし、私がいけないのだ」

「なぜです？」

とりあえず、訊く。

「当然だろう！ この文通は私の方から言い出したのだ。なのに、イレーナ嬢とすでに数度手紙を交わしている身であるのに、いまだ私は彼女の関心ごとを掴めずにいる。彼女も興味のある事柄であったなら、もっと話も弾ませ、この文通を楽しんでくれるだろうと思うのだが……不甲斐ない」

肩を落とされる殿下に、私は（本当にこの方はどうしてこう女性関することだと本気を出されるのか）やや呆れた。けれど少しして、

ふと、良い考えが頭をよぎった私は、にっこりと、呆れ顔を笑みに変える。

「殿下、妹の興味を持つものを、私が教えて差し上げましょうか」「なに！ 本当か?!」

嬉しそうに声を弾ませる殿下。私は頷いて妹の好きなものを殿下に申し上げる。

「イレーナは物語や御伽噺が好きなのです」

屋敷に籠もりがち（父の教育方針のせいだが）の妹の趣味は、母が同じく少女時代読み集めていた本の読書をすることであった。

「ふむ、物語か。年頃の少女らしい、良い趣味ではないか。それで、イレーナ嬢はどのような本を好まれるのだい？」

続きを訊ねる陛下に、私はそつと口を閉ざす。

「フェルナンド？ そこまで教えて黙るのは酷いではないか。それとも、これ以上は本人に聞けと？」

「いえ、きちんと教えて差し上げますよ、ただ」

「ただ？」

「お仕事をきつちり片付けられた後で」

私は山積みになされた書類の中から一枚をとって殿下に差し出した。

「……フェルナンド。君、この四年間で私の扱い方を心得てきてないか？ 私は気が付けば君に上手く操られているような気がするのだが」

書類と私を交互に見た後、結局はそれを受け取られる。

本当に、扱い方さえ心得れば、実にやりやすい方なのだ。四年間の経験を経て、私は殿下という雲を掴む方法を着実に身に付けてきたのであった。

04：寝不足と図書館

暖かい春の日差しが差し込む穏やかな昼下がり。まどろみに任せて眠りに落ち、夢の中でいいから愛しい人のもとへ忍んでいきたいものである。と、くさいこと言ってみるが要は、眠いってことだ。

第三王子執務室。最近はさっぱり使用されることのなかったこの部屋だが（別の目的で使用したことは多々あった）、実に数週間ぶりに、私はこの部屋に籠もり仕事をしていた。数日前まで山のように積み重ねられていた書類は残すところあと一枚となっている。連日連夜、徹夜続きで勤務を行なってきた結果、ようやく仕事の終わりが見えてきた。人間、やればできるのだと感心するが（自画自賛）、ここへきて私は強烈な睡魔に襲われていた。

「ああああ、もう私は駄目だ、フェルナンド……」

油断すれば机に突っ伏してしまいそうになる私に、彼は付け入る暇もなく最後の書類を差し出した。

「眠るならもう一枚書類を終わらせてからにして下さい」

「眠すぎて死にそうだ……」

「徹夜続きなのは私も同じです、殿下。あなたにつき合わされてここ一週間、家に帰ることができないでいるのだから。超過勤務で過労死しそうなのはこっちの方ですよ」

「君が死んだら化けて出そうで怖いな」

「死んでまで殿下のもとに侍りたくはありません」

私だつて男の幽霊に取り付かれるなどまっぴらごめんだ。取り殺されるなら艶かしい女性の幽霊を希望する。

フェルナンドを過労死させぬ為、私は最後の気力を振り絞り、書類を受け取って目を通した。直轄する領地の治水工事の件についてのもので、数カ月後に訪れる雨期に備え、工事の許可を申請したい

という内容が書かれている。

「この部分はきちんと確認が取れているのか？」

「とつくに」

「関係する資料は？」

「こちらに揃っております」

「ふむ。ではこのこと、ここを確認して。あとは……、いいだろう。

申請を許可する」

サインを記し、フェルナンドに戻した。彼はすぐさま侍従に指示して関係部署にそれを送るように言う。

出来る補佐官を持って私は幸せだ。口うるさいところが玉に瑕だが、フェルナンドは実に優秀な青年である。私のもとに来る前は父君の仕事を手伝っていたと言うから、基本がしっかり出来ているのだろう。順応力もあり、上司としては大助かりだ（……しかし、先程から彼の態度がツケツケしているのは何故だろう。いつもより言動に棘があるのは寝不足が原因か？）。

「さて、これで殿下が遊び歩いていた間に溜まっていた仕事は一通り終わりましたね」

ほら、また。超過勤務をさせた私に対する腹いせなのか。目つきも険しく、そうして睨まれると父君にそっくりで、少し怖いのだ。

「フェルナンド。君、ものすごく不機嫌だね」

「そうですね？ まあ、偉いくせに全く仕事をなさらない上司のおかげで、疲労と心労は頂点に達していますけど」

「……申し訳ない」

今後は普段からもう少し仕事をするにとしよう。

「ところで、どうしてまた急に仕事を片付けられたのですか？」

「ん？ いや、ちょっと」

「もしかして、また何かよからぬことを考えていらっしやるのですか」

曖昧に流す私に、濃紺の瞳が剣呑な光を帯びた。

アルバートといい、フェルナンドといい、クラレンス家の人間は

どうしてこつ背が高いのか（別に私が低いとかそういうわけではない）。ただでさえきつい目つきをしていると言つのに、そのように目を細め上から見下ろされては、恐ろしくてかなわんではないか。それに、私はまだ悪いことはしていない。折角仕事に精を出し、溜まっていた仕事全部終わらせたというのに、どうしてそう疑いの眼差しで見られなければならないのか。ここはむしろ褒めるべきところだと思つのだ。

しかしフェルナンドは、仕事をするのは当然ですうんぬんと小言をなげてきた。仕事が出来ただけでなく、上司を敬う心も部下には必要だと思つのだが、どうだろう。

「さ、仕事も終わったのだし、下がってよいぞ。フェルナンド」
「帰りたいのは山々なのですが……殿下は何をしておいでです」
立ち上がり、着替えを始める私に、フェルナンドは訝しげな視線を寄越した。目ざといやつだ。

「着替えをしている」

「見ればわかります。どこかお出かけでも？」

「ん、ああ、まあ、ちよつと、な」

「どちらへ？」

はぐらかそうとするも、切れ長の瞳が私を睨む。

「……」

「殿下？」

問い詰めるフェルナンドに、数分後、私は白旗を振って行き先を白状したのだった。寝不足プラス不機嫌プラス身長合わせ技で、彼の眼力は倍増しである。勝てるわけがなからう。

所は変わって王宮図書館。“王宮”についてはいるが、しかし王族や貴族だけでなく、広く一般に開放されている王国立の公共図書

館だ。住所などの情報を登録して、利用証を発行してもらえば誰でも自由に利用できるようになっていた。蔵書数は当然のことながら国で一番を誇り、古い時代の貴重な文献から、最近の出版物などが網羅的に納められている。

仕事を終えた私は、軽装に着替えその図書館へと足を運んだ。

傍らには寝不足顔のフェルナンドがついている。お忍びで行くから警護もなにも必要ない、ついてくるなと言ったのに、そうはいかないと目の下に隈を携えながら、無理矢理ついてきてしまった。徹夜続きで寝不足だろうからと配慮したのに、上司心部下知らず、である。

「ふあ……失礼。それにしても、何故いきなり図書館などに足を運ばれたのです？ 王族専用の書庫なら別にありますのに」

欠伸を噛み殺しながら言うフェルナンドに、私は苦笑を浮かべた。確かに、多くの者が出入りする王宮図書館とは異なり、書庫は王宮の内部、警備も厳重な場所にあつて私のような身分の者が利用するにはそちらの方が安全だろう。

「書庫であつたら君の手を煩わせずに済んだのだけだね。しかし恐らく私が探している本は書庫にはないと思うのだよ」

「どのような本をお探して？」

「物語」

「は？」

数秒首をかしげたフェルナンドだったが、すぐに合点がいったらしく「なるほど」と声を漏らした。

「イレーナですか」

聞く彼にそうだと頷く。

「だから、ここ数日仕事に励んでいらつしやつたのですね」

「ああ、ゆっくり読書できる時間を確保しようと思つてね。仕事を片付けた後ならイレーナ嬢も『仕事を優先して』などとは言わないだろう？」

「本当に、女性のこととなると無駄に力を発揮なさるのですね」

「いいではないか。結果的に仕事を終わらせたのだから」

「……今後殿下が怠けられたら、イレーナに殿下を諫めるよう言ってもらおうと思います」

彼女を使うのは卑怯じゃあないだろうか。目の前にいるのだから直接言ってくれとも思うが、「私が言っても聞いてくださらないではないですか」と言われ、それもそうだと頷く。やはり頼みごとをされるのであれば、女性の方が断然やる気が出るものだ。男に仕事をしると言われても、鬱陶しいだけでむしろ逆効果になるだろう。

そうこうしているうちに、物語の棚へと辿りついた。

ぎっしりと並べられた本の数々に、書庫ではこうはいかないと感嘆の溜息が出る。王族専用の書庫はいかんせん学術書の類ばかりが納められており、物語は後宮の、母上が主に利用する書庫に行かねばならない。後宮は、子どもの頃は許可なく出入りできていたのだが、成人した今は、兄上の奥方が輿入れしたこともあって、なかなか入りづらい場所となってしまった（別に私は義姉上に手を出したりなどしないのに）。

早速私はお目当ての本を探すことにした。物語、物語、と。

整然と棚に並ぶのは、ルクソール夫人、ルイス^{ハナガタリ}シユヴェル、マリア^{ハナガタリ}ナタリア、『ある夜の物語』、『麗しい月の姫君』、『花語』、『星々の夜明け』等々、著名な物語の数々だ。イレーナ嬢はどのような物語が好きなのか、とりあえず有名なものの中から一冊を手にし、ぱらりと開いてみる。

「ふむ、やはり傑作はいつの時代においても傑作なのだな」

「表紙を開いただけで何を読んだ気になっているのです」

格好をつけた私に容赦なく突っ込んだ部下に振り向く。彼は十数冊の本を抱え立っていた。

「なんだい、君も読書するのか？」

問うと、彼は首を横に振り持っていた本を机に置いた。

「私が読むものではありません。妹がよく読んでいた本を持ってきた

のですよ。あまり有名とは言えないものが多いので、見つけにくい
かと思ひまして」

「フェルナンド！」

君は本当に優秀な部下だな！

「早く家に帰りたいので、さっさと読むか借りるかなさっってお部屋
にお戻り下さい」

……感動した途端本音を漏らすことはやめてくれないだろうか。
上げて落とされると結構な衝撃があるものだ。

「そうだね、じゃあこれらを借りて戻るとしようか」

立ち上がった時

「フェルナンド様？」

愛らしい声が響いた。

声のしたほうを見れば、一人の美しい女性が立っている。

赤っぽい金色の巻き毛に緑色の瞳をしたお嬢さんは、瞳と同じ緑
のドレスの裾を翻しながら私たち　フェルナンドの方へと歩み寄
ってきた。

「お久しぶりですわ。最近全然我が家へいらっしやらないから。お
元気でした？」

言う笑顔はやはり可憐で美しく、フェルナンドのいい人だろうか
とつい不躰に見つめてしまった。

いけない、いけない。恋人同士の会話を邪魔するなど無粋も無粋。
私は二人の会話が終わるまでフェルナンドが持ってきてくれた本を
読んでいることにした。

積み重ねられた本の一番上の一冊を手にとって開く。エリサ＝口
ウ著、『茨』^{ウラナ}。

初めて読む物語だ。

男爵家の長女、リリアは美しいが臆病な娘。幼い頃恐ろしい経験

をして以来人を信じられなくなってしまった。

彼女の十八歳の誕生日、多くの貴族たちが噂を聞きつけ求婚にやってくる。男達は挙って彼女を妻に欲しがったが、けれど、リリアはその求婚を悉く断っていった。言い寄る男たちに難題をふっかけては、追い返してしまふのだ。頑ななその態度に、人々はやがて『美しいが棘のある、茨の君』だとリリアを称するようになった。

ある日、一人の男が彼女に結婚を申し込む。男は隣国の王子で、見目も麗しく、世の女たちが揃って熱を上げる相手だった。しかし、リリアはやはり王子の求婚を受けることなく、姿も見せずに使用人を使い一通の手紙を寄越した。

『もし、私を見つけられたなら、私は貴方の妻になりましょう』
数日後、彼女は夜会を開く。自分と同一年の娘たちを集め、その中からリリアを見つけだせと言うのだ。

周りの者たちは無理難題をいう彼女にあきれ、王子に同情を抱いた。王子は一度も彼女を見たことがない。噂を聞き、やってきたはいいけれど、実際にはリリアのことは何一つ知らないのであった。

そしてついに、夜会の日が訪れる

「殿下」

「うわあ！」

すっかり物語に集中していた私は、突然かけられた声に驚き飛び上がった。振り向けばフェルナンドも私の声に驚いたらしく、びっくりとした表情を浮かべている。

「な、なんですか、急に」

それは私の台詞だ。王子がリリア嬢を見つけられるかどうかの瀬戸際であったのに。空気を読みたまえ、空気を。続きは部屋へ帰ってじっくりと読むことにして、本を閉じフェルナンドに向き直る。

「もう話は済んだのかい？」

「あ、ええ。それで、エレナ嬢が殿下にご挨拶したいと」

見れば巻き毛の美しいお嬢さんはまだそこに立っていた。エレナ、というと、もしかやアステリオ伯爵の二番目のご令嬢だろうか。脳裏

に緑眼の伯爵の顔を思い浮かべ、そういえば眼の色も赤みを帯びた金髪もそっくりだと得心する。父君はずいぶんと丸い いや、ふくよかでいらしたが、その部分は似ずに済んだらしい。エレナ嬢は出ているところはきちんとしている、スレンダーで魅力的な身体のお嬢さんである。羨ましいぞ、フェルナンド。

「お初にお目にかかります、エレナ＝リズ＝アステリオですわ。父がいつもお世話になっております」

「いや、こちらこそ父君にはいつも世話になってるよ」

なんて、実際にアステリオ伯爵に会ったことは数えるほどしかないのだが。社交辞令、社交辞令。

「そんな、殿下には良くしていただいているようで」

エレナ嬢も同じように社交辞令で返し、それで会話が終わるかと思っただとき。

「……そうですわ、殿下、今度我が家でお茶会を開こうと思っっているのですが、よろしければ殿下もいらっしやいませんか？」

思わぬ提案がなされた。

「お茶会？」

「ええ、親しい方たちを呼んで庭でお茶を楽しむのですわ。お茶会というよりは、立食パーティみたいな形になるのですけれど」

「それは、それは」

是非に、と応えたいところだが、ふと傍らのフェルナンドに視線を移せば渋い顔をしている。部下の愛しい人を横取りする私ではないものの（だからエレナ嬢とのやりとりを社交辞令程度でとどめているのだ）、一方で美しい人の誘いを断ることも躊躇われた。そもそも私は夜会やお茶会といった華々しい場所が好きなのだ（色んな女性とも出会えるし）。

「是非いらしてくださいませ。さきほどフェルナンド様にもお伝えしたのですが、殿下もいらっしやれば、きっと楽しいお茶会になると思いますわ」

差し出される招待状を、ここまでできて否ということもできずに受

け取った。

「それでは、喜んで参加させてもらおうよ」

「そんなに心配せずとも、私は君のいい人を取ったりしないよ」
去っていくエレナ嬢を見ながら、フェルナンドはまだ渋い顔をしている。

いくら“女たらし”と名高い私でも、それなりに節操はあるつもりだ。だから安心したまえ、と声をかけるが、フェルナンドはキョトンと首をかしげた。

「なにか誤解なさっていませんか？ 彼女は他にしつかりとした許婚がおられますよ」

「は？」

今度は私が首をかしげる番だった。

「では君は許婚のいる相手を好きになったのかい？ むむ、険しい道だが、恋とは得てしてそういうものだ。フェルナンド、君がそんなに彼女が好きだというのならばとめはせん。存分につき進……」
「だから違いますって」

「……ではどうして私が彼女と話していたとき、変な顔をしていたのだ」

「え？」

「今もしている。彼女を好いているわけでないのなら、どうしてエレナ嬢が私を茶会に誘ったとき顔を歪めたんだい？」

「いや、それは……」

「うん？」

口ごもるフェルナンド。彼が私を茶会に行かせたがらぬ理由を知るのは、もう少し後になってからだった。

その後、フェルナンドに教えてもらった本を読み終えた私は、早速イレーナに手紙を書いてみた。

数日の後に送られてきた手紙は、確かに今までよりは大分くいつきもよく、正に“楽しい文通”であったのだが

『読書をなさる前にきちんと仕事を片付けられたと兄にお聞きしました。これからも、あまり仕事をお溜めになりませんように……』

どうやら、手紙に小言を書くのは彼女なりの励ましの言葉らしい。謹んで仕事に励むことにする。

05：薔薇と茶会

夜会会場には沢山の娘たちが集められていた。色とりどりのドレスを身に纏い、光り輝く高価な宝石たちで己を飾って、ただ一人、ダンスホールの中央に立つ男性に視線を向けている。

好奇心と、憧れ、恋情に、期待。様々な思いの込められた視線を一身に浴びながら、王子は物怖じすることなく会場を見回した。

背の高い者、低い者、愛らしい瞳の娘に、色香を漂わせる娘。ブルンドの髪や栗毛のストレート、漆黒の髪を持つ娘もいる。多種多様な容姿の娘たちは誰も彼も美しく、気品に溢れている。

(よくこんな集めたものだ)

王子は苦笑して、また会場内に視線を巡らせた。

爛々と輝くシャンデリアのもと、花々は無数に咲き誇る。ドレスが揺れる度に視線を移し、美しい顔に浮かんだ微笑みを見る度にまだ見ぬ愛しい人かもと思いを馳せる。

彼の視線が二度、三度と会場内を通り過ぎた後、王子はついに決心して視線を留めた。

コッ

歩き出した彼に、会場がざわめく。

彼の行き着く先は誰のものなのか。

迷いなく歩を進める王子に、花たちはそっと身を退けて道をあけた。

美しい髪を持つ娘の前を通り過ぎ、最高級のドレスに身を包んだ娘の前を横切つて。王子はただ一人の娘だけを見つめて歩き続ける。広い会場の端の端までたどり着いた時、ようやく彼は歩むのを止め、その場に膝を折った。そして、目の前の、何の変哲もない地味な白色のドレスを纏う女性に手を差し伸べる。

「見つけた、私の茨。^{ひばこ} 私が愛しいと恋焦がれる娘はあなたですね、
リリア」

重ねられた手に恭しく口づけると、娘はその美しい顔に笑みを浮かべ彼を見つめ返した。

「求婚、^{プロポーズ}慎んでお受けいたしますわ、王子殿下」

エリサ「ロウ著『茨』より。

物語の王子は必ず運命の女性を見つけ出すものだ。例えそれがどんな難題であつても、運命の赤い糸がきつと彼を彼女のもとへと導いてくれるから。

けれど、物語と現実とは違う。人の心は時にその持ち主にとつても不可思議で難解なものになりうる。だから、私は期待なんかしない。どんなに甘い言葉を囁かれても、そしてそれがどんなに心揺さぶられるものであつても、現実には物語のようにはいかないのだから。

馬車は城の正門を過ぎて、王都にある貴族街を走っていた。

今日はこれからエレナ嬢に招待された茶会に参加する為、会場であるアステリオ伯爵の屋敷へと向かう。他の貴族たち同様、アステリオ伯爵も領地とは別に王都に屋敷を持ち、そこに妻子たちを住まわせているのだが、本日の茶会はその王都にある屋敷の方で行われるということ、同じくエレナ嬢に誘いを受けたフェルナンドを連れ立ち、ともに馬車へと乗り込んだ。のだが。

「まさか君がここまで車酔いをするとはねえ」

呆れ口調でそういうと、フェルナンドは外を見やっただま「はい……」と弱弱しく言葉を紡いだ。

城を出てから小半時。もうすぐ屋敷にも着くだろうが、この短い時間の内ですっかり車に酔ってしまった彼は、今にも死んでしま

そんな様子で顔を青くし窓にしがみついていた。新鮮な空気を少しでも多く取り入れようと必死に深呼吸を繰り返しているのが、なんとも哀れだ。

普段はしゃきりと仕事のできる優秀な部下である彼が、実は馬車揺れに弱いとは、なんと無駄な　いや、意外な新事実（　以前クラレンス家に忍んで行った際は、彼はあらかじめ屋敷内にいて待っていたので、彼と馬車に乗るのはこれが初めてだ）。

父君の仕事を手伝っていた際、馬車で領地をまわり、王都と領地を行き来するなんてしょっちゅうだったろうに、てつきり車酔いには強いかと思いきや、小半時馬車に揺られただけでこのざま。訊けば領地の行き来をしていた際は酔い止めの服用を欠かさなかったらしい。

「その酔い止め、今日も飲んできたほうがよかったんじゃないのかい？」

「短時間の移動でしたし、大丈夫か思ったのです。それに飲むと、眠くなってしまうので……」

殿下の前で眠るなど失礼な真似はできません、と続けるフェルナンドに、「私は別に男の寝込みを襲ったりはしないが？」と返す。すぐさま「そういうことを言っているではありません」凄じい剣幕で睨まれるが、場を和ませようと吐いた冗談ではないか。もう少し上司の気遣いというものを察して欲しいものである。

「君はいつも生真面目すぎるのだよ」

「殿下がいつも軽薄すぎるのです」

車酔いにやられていても、手厳しい返しは相変わらずだ。

「目の前で居眠りをされることよりも、嘔吐されるほうがよっぽど迷惑なのだけどね」

「わ、私はそのようなこといたしません！　うくっ……」

今にも吐きそうな顔で言われても、なんの説得力もない。私は苦笑して帰りの馬車では酔い止めを飲むように“命令”したのだった。

その後いくらしもないうちに馬車はゴトリと音を立てて停車する。
「さて、ようやくついたようだ」

「……そのようですね」

真つ青な顔のフェルナンドが先に降り、訪問を告げる。

屋敷には既に何人かの貴族たちが集まっているようで、庭の方から賑やかな声が聞こえてくる。

「エーリク殿下、フェルナンド様、ようこそおいでくださいました」
自ら出迎えにやってきてくれたエレナ嬢の今日の装いは春らしい淡い黄色のドレス。ふんだんにレースがあしらわれたそれは一見エレナ嬢には可愛らしすぎる気もするが、けれどシンプルな首飾りや髪飾りですつきりと全体をまとめている。

「ああ、今日のあなたも実に麗しい……」

思わず口から出てしまった正直な感嘆に、エレナ嬢は「まあ、殿下にお褒めいただけるなんて光栄ですわ」と僅かに頬を染め、フェルナンドは「コホン」とわざとらしく咳払いをする。なんだ、素直に思ったことを口に出してなにが悪いのだ。本当ならばここで白く滑らかなお手にキスでもしたいところだが、けれどそんなことをすれば、王子殿下ともあるうかたが云々と小言が飛んでくるのは分かってきつているので、真に心苦しいが自重させていただく。それに、「ところで、そちらの美しい方は？」

エレナ嬢とともに私たちを出迎えた女性になり、私は尋ねた。すると、エレナ嬢は「ああ、」とその女性を振り返り、こちらへと手招く。

「殿下、妹のルイーズです」

「ルイーズ……リザアステリオと申します」

言ってルイーズは控えめに礼の形を取る。姉のエレナ嬢とはまた違った魅力を持つ美人だ。癖一つない柔らかな茶の髪を横にゆるく結わえ、瞳の色は姉と同じ緑。ドレスはこれまた春らしい薄い桃色だ。シンプルな装飾がこの控えめだが月のように美しい女性の魅力を引き立てている。

「いやあ、アステリオ伯爵にこのように美しい娘さんが二人もいらつしゃるとは、驚いたな」

「ふふ、お上手ですわね、殿下」

「いやいやいや、本当のことを言っただよ」

アステリオ家、意外にも隠れた美女の宝庫である。ルイーズの後ろに控えた黒髪の侍女も美しい。

と、視線をやったことがばれたのか、侍女が突然顔を上げる。

「お嬢様、そろそろ」

「あら、そうね……」

急かす様にいわれ、ルイーズは困ったように一瞬外の様子を窺う。「うん？　どうかされたのかな」

つられて後ろを振り返れば、アステリオ伯爵家の紋章をつけた馬車が一台、入り口につけられたところだった。

「申し訳御座いませぬ、殿下。妹はこれから所用でしばし出かけねばならないのです……」

「そうなのかい？」

「ええ、妹の乳母をやっていた女性が急に容態を崩しまして。これから様子を見に参るのです」

「それは大変じゃないか。では、エレナ嬢、君も？」

「いえ、それは。仮にも私は此度の主催者ですから、今日は一日皆様のお相手をさせていただきます。ですが、妹だけは少し席を外さねばならなくて……」

よろしいでしょうか？　上目遣いに訊ねられ、首を横に触れる男がいるだろうか。否、いない。

「かまわないよ。ルイーズ嬢と話せないのは残念だが……」

名残惜しさについて本音をもらせば、「殿下」と小声でフェルナンドに窺められる。ええい、分かっているよ。侍女殿も急いでいるのは分かるが、フェルナンドと一緒にあって睨まなくてくれ。男ににらまれるのはどうということはないが、女性に睨まれると少々堪えるものがある。まあ、女性はどんな顔でも美しいのだが、できるこ

となら笑顔を向けられたいではないか。

「貴女と話すのはまたの機会にとっておくことにしよう、今日のところは早くその乳母殿のもとへ行っておあげ」

「ありがとうございます」

そう、このような美しい笑顔を見たいがために、私は女性の奴隷と化すのだ。体調を崩した乳母を気遣い、わざわざその足で駆けつけるとは、なんと心根のお優しい方だろう。

馬車に乗り込むルイーズの背を見送る傍ら、ふと横からなんともいえない視線が投げかけられるのを感じて振り返る。

「フェルナンド……君ねえ、どうしてそのように渋い顔をするのだい？ 私は別に、ルイーズになにかしようなどは考えていないよ」
確かに、女性をみたら甘い言葉をささやくことが私の癖となっている部分があるのは否めないが、けれど今は愛しい人が他にいないのだ。その愛しい人の兄の前で、他の女性を口説くというような馬鹿な失態を私がすると思うのか。

それとも、

「もしか君、ルイーズ嬢のことが……？」

言つと、フェルナンドは顔をトマトのように赤くして、「違います！」と否定する。君、それでは肯定しているのと変わらないではないか。なるほどねえ、茶会に来るのを渋っていたのは、ルイーズ嬢と私を会わせたくなかったからか。

「全く、君という男は」

「違つと申し上げております！」

声を荒げるが、全くの逆効果だ。こういう分かりやすいところが、実にからかいやしいではなく、彼の親しみやすさの所以なのだろう。

「やれやれ、そのように怖い顔をせずとも、彼女をとったりしない

よ」

「だから違いますって！」

頑として否定するフェルナンドの声を背に、私たちはエレナ嬢の導きで屋敷の庭園へと向かった。

「これは……」

そして飛び込んできた風景に、思わず感嘆の声を漏らす。屋敷の中も素晴らしい装飾品などが飾られ、センス溢れる内装だったが、庭園の方もまた素晴らしい。

アステリオ夫人自慢のバラ庭園は色とりどりの薔薇で溢れ、芳しい匂いで満ちていた。複数の薔薇を上手く組み合わせ、それぞれの特徴を活かして植えられ、どこを見ても「素晴らしい」の一言しか出てこない。

「……はあ、噂には聞いていたがここまでとは」

「相変わらず素晴らしい庭ですね」

先ほどまで怒っていたフェルナンドもまた、その庭園の美しさに目を奪われ、ため息を漏らす。

「庭師たちが手塩にかけて世話をしておりますから」

「いやはや、庭師の腕もさることながら、庭園の花の配置などはエレナ嬢の母君が指示なさっているとか。ここまでの庭はなかなかありませんよ」

王宮の庭園もデザインしてもらいたいものだ。そう漏らせば、エレナ嬢は謙遜しつつも誇らしげな表情になる。

「さあ、殿下、フェルナンド様。今日はどうか楽しんでいってくださいませ」

「ああ、是非そうさせてもらおうよ」

庭園の真ん中には立食用の軽くつまめる食事が用意されている。客はエレナ嬢の友人が多いのか、若い華やかな女性が目立つ。

うん、花以外にも実に楽しめそうな茶会である。

「殿下？ 何かよからぬ事を考えておいでではないでしょうかね」
「う……」

君は本当に目敏い男だな、フェルナンド。たまの休みぐらい羽をのばしたっていいではないか。イレーナとの約束通り、茶会の前に

やるべき仕事はすべて片づけたのだし、人間時には休暇も必要なのだ。

「休暇と女性を口説くことは関係ないでしょう」

「口説きはしない。ただ話をするだけだ」

それに、いつもむさい男に囲まれ仕事をしている身としてはこうして華やかな女性陣に囲まれ癒されることも重要な休養になるのだよ。

「殿下……?」

おおっと、早速私を癒してくれる天使が舞い降りたようである。

私はくるりと身を翻し、声の主の方に振り返った。

げ。

「エーリク殿下ではありませんか」

「こ、これはユーリア義姉上……」

そこにいたのは我が二番目の兄、ラルス兄上の奥方ユーリア義姉上だった。

「殿下も茶会に招待されていたのですね」

そう言って微笑み近寄っていらっしやる義姉上は相変わらず美しい。蜂蜜色の艶やかな髪を頭の横に束ね、緩く巻かれた髪はゆるやかな曲線を描き彼女の胸元で揺れている。ドレスはミルクテイバージュの淡いもの。胸元にある 兄上からの贈り物だろうか 小振りだが凝った作りの銀細工の首飾りがちょうどよいアクセントとなって彼女をより美しく見せる。

「随分と久しぶりな気がしますわ、最近はずっとも私たちの方へ顔を見せにきてくださらないんだもの」

「はは、義姉上にお会いしたいのは山々なのですが、あまり頻繁に会いに行くと兄上に睨まれますので」

「まあ」

くすくす、と鈴を転がすような笑い声が響く。横からまた嫌になるくらいの視線を感じるが、心配するなフェルナンド。いくら私でも流石に兄上の奥方に手を出す勇氣はない、……多分。

「それよりも、義姉上？ 今日ここで私に会ったことは母上には内緒にしてくださいませでしようか」

「え？ 王妃陛下に？」

「ええ。一応仕事は片付けてきたのですが、母上に知られるとまた色々和小言を飛ばされそうです。それに、できたら兄上たちにも」

「……いいですけど、殿下にはそれよりも知られたくない相手がいらつしやるのでは？」

「はい？」

キョトンとする私に、義姉上はいたずらっ子のような笑みを浮かべる。

「私、知っていますのよ。殿下には近頃夢中になっている方がいるとか。エレナ嬢の誘いを受けて茶会に来たことを知られたくないのは、本当はその方なのでしょう？」

「はは、これはこれは。まさか義姉上まで知っていらつしやるとは、耳が早い」

「あら、女は噂好きな生き物ですから」

「いえ、そう言っているわけでは……でも、そうです。その通りなのです。実は新しい思い人が出来まして、その方にばれると困るのですよ」

なーんて、その思い人の兄が真横にいるのだが。

そういえば、フェルナンドが茶会にいい顔をしなかったのはもしやイレナ嬢の件が関係していたのだろうか。よし、後で彼にはきつちりと口止めをしておくことにしよう。

「ふふ、分かりましたわ。では今日のことは内緒にしておきます」

「助かります、義姉上」

二人につこり笑って秘密の約束を交わす。人妻と秘密を分かち合う、ああ、なんて甘美な響きだろう。などとふざけたことを言えば即刻兄上からの鉄拳が飛んでくるのは分かりきっているので、義姉上の前では自重、自重の私である。

05・薔薇と茶会（後書き）

茶会編、もう少し続きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0307o/>

ルーテシアの第三王子

2011年5月15日14時10分発行